

朝に思う



津 守 真

保育の現場に出る日日、私は、朝、銀杏の並木道を歩きながら、日ごとに変化する葉の色や、日によってことなる雲の形姿を見ている。それとともに、まもなくたしかにはじまるこの日のことを考えている。何が起るか、何をするかという対象的側面を考へることもあるが、それ以前に、私自身が積極的に保育の現場にはいつてゆくことができるように、内心の戦いをしていると言ってもよい。このことは生

来の保育者にはわかりにくいことらしいが、私にとっては真剣な作業である。

数日前、私は、Giorgi, A.: Psychology as a Human Science: A Phenomenologically Based Approach を、夜おそくまでかかって読んだ。著者は、ヴァント以来の心理学の歴史を概観し、自然科学の方法にかかわる、客観的事実、実証主義、数量化、因果論、決定論、予測性等の方法が、人間を研究す

る学問に適切か否かを吟味する。その批判に立つて、研究者から切り離された対象として人間を見るのではなく、共に生きる人間として、相互性の中で見る心理学を提唱する。外的観察者の観点からは、行動は可視的であり、経験は不可視的であるが、内的行為者の観点からは、経験が可視的であって、行動は不可視のものとなること、数量化された行動よりも、表現としての行動の質的側面に着目することなど、私が十数年来くり返し述べてきたのと同方向の論である。ところが、このような現象学的観点から理論的書物を書いている著者たちは、ほとんどが子どもの現場で仕事をしている人でないのは不思議である。また、逆に、生きた子どもの仕事をしているはずの人が、そこから得られる自分の見識をすてて、機械論的説明に頼ろうとする傾向があるのも不思議である。

考えてみると、生の現象にみちている保育の現場の中から、人間の学問をつくり出そうとする試み

は、意外と、前人未踏の分野なのである。保育者が現場に身を浸して獲得する直接体験は、まさに人間の本質にふれている。保育の現場にはいつて一日を過すことは、実践的にも研究的にも大きな価値があることをあらためて認識したとき、私は身体的には疲労を感じていたけれども、この日はことに積極的に現場に向うことができた。

現場に出ると、次々にいろいろのことが起り、一日が夢中のうちに過ぎることが多いので、次の日がくるまで、朝のひとときの重要さを考えるゆとりはめったにない。そして、翌朝がきて、また同じように道を歩きながら、子どもとの生活に自分が積極的になれるように、心を向け直す。このときから保育の一日が始まっていることを、私は次第にはっきりと認識するようになってきている。

*

*

朝、子どもたちが、ひとりひとり、親と共に門からはいつてくるとき、それぞれの過去も未来も、このひとときの姿に凝縮しているように思えて、たとえ互いに声をかけあわないほど離れていても、この一瞬を通じて、運命的なつながりを感じさせられる。

養護学校という場所にくるまでには、親子とも、遍歴し、傷つき、さまざまな悩みを経験している。子どもの保育を担当するおとなたちも、皆、それぞれの人生の中で、この子たちとの偶然の出会いを自らの選択との間に揺れ動きつつ、ここに集まっている。ことしは、私も、ここに到達するまでに、葛藤と決断と、それに伴う動揺の時期を経ねばならな

ったので、一見平和な風景の中にも、さまざまな実人生が秘められていることを思った。

大学から現場に、実際に身柄が移ったことよって、わかったことがいくつかある。

四月、新学期、第一日目、子どもたちが私に向っていままでよりもっと親しげに近寄ってきてくれるように思えた。それは、とくに、人に対して無関心だったKが傍にきて、私の顔をみてにっこり笑い、手をひいたことによるかもしれない。しかし、それだけではなくて、いろいろの子どもが私を優しい目で見てくれた。私は腰をすえて、ここにいつもいるという落ち着きをもって子どもたちを見ていたから、それは私の精神のプロジェクトだと説明もできるだろう。だがそれ以上に、実際に子どもを見る自分の目にも親しみが増したのだと思う。この子どもたちが、自分の子どものように思えたのは、私自身が、この子どもたちの生活と成長の土台のひとつに組みこまれたという存在の根底の問題かと思

う。

日がたつにつれて、私にとって明白になってきたもうひとつのことがある。それは、たとえ私が毎日子どもたちに接したとしても、長としての立場から見るので、ひとりひとりの子どもに対して、知りうることは限られているということである。毎日、それぞれの子どもと親しくして、その子どもたちの生活全体を見ているのは担任である。特定の子どもについての理解を深めているのは、ひとりの子どもとゆっくりとつきあっている実習の学生の場合もある。私は次第にそれぞれの子どもともっと親しくしたいと思っているけれども、ある限度をこえることはできないだろう。

担任は、自分の担当する子どもについて謙虚である。それは、子どもを少しわかったと思った日には、子どもは変化しており、自分の理解が絶対であることなどありえないということを、体験的に知

っているからである。それだけに一般には不動の体系的知識をもつようにみえる専門家に対して、簡単に自分を明け渡してしまおうおそれがある。

子どもに対する立場は、人によって異なるが、それぞれの立場をこえて、保育の観点から共通のことがひとつある。それは、子どもと直接にふれて、共に過ごすひとときは、その気になればだれにでも与えられるということである。そのときは、子どもも心を打ち明けてあそぶ。このときのことについては、一度限りの訪問者も、いつもそこにいる人も、立場をこえて、同じ権利をもって語ることができる。

(愛育養護学校)